

〔論 文〕

ポイニクス (『イリアス』第9巻434-605行) にみる教師像

鈴木 円

Phoenix as Teacher: *Iliad* 9. 434-605.

Madoka SUZUKI

Because of his speech in the *Iliad* 9. 434-605, Phoenix has been recognized as an eminent counsellor and teacher for centuries. In this study, six aspects of Phoenix as teacher are analyzed in light of the relevant descriptions by Plato, Cicero, Plutarch and Quintilian. The six aspects are (1) a teacher who teaches words and deeds, (2) a teacher who loves students as if they are his own children, (3) a teacher who does not conceal his weakness, (4) a teacher who teaches morals using examples, (5) a teacher who helps students learn to conform to existing social norms and morality, and (6) a teacher whose instructions are rejected by his students. These six aspects have much in common with present-day schoolteachers' roles and personalities, so studying Phoenix as teacher will benefit student-teacher relationships today.

Key words: the *Iliad* (『イリアス』), *Phoenix* (ポイニクス), *paedagogus* (師傅), *schoolteacher* (学校教師), *student-teacher relationships* (生徒教師関係)

はじめに—研究の目的—

本論文は、『イリアス』第9巻434-605行に描かれたポイニクスの語りを対象とし、その語りにあられる彼の教師像を分析することを通して、教師の在り方をめぐる問題を提起することを目的とする。

ポイニクスは、『イリアス』第9巻において、アキレウスの師傅として、彼を説得する役割を帯びて登場する人物である。彼の語りの内容から、彼は、古代ギリシア・ローマを通じてパイダゴゴスの鑑と位置づけられて、キケロ、プルタルコス、クインティリアヌスらの著作にその名が記され、またプラトンも彼に言及している。このポイニクスの語りから、彼の教師像を明らかにし、さらにすすんで今日までつながる教師の在り方をめぐる問題を提起することが本論文の課題とするところである。

本論文の構成は、以下の通りである。まず第1節では、『イリアス』の教育史上の位置づけについて

古代ギリシアの言説と現代の教育史家の見解を振り返る。第2節では、『イリアス』とポイニクスの語りを概観する。第3節では、ポイニクスの語りにあられるポイニクスの教師像を6つの観点に分けて考察する。そして、前節で明らかになったポイニクスの教師像から導かれる、今日につながる教師の在り方をめぐる問題を提起して結びとする。

1. 『イリアス』の教育史上の位置づけ

ホメロスの名を冠せられた『イリアス』は、『オデュッセイア』とともに古代ギリシアの教育を考える上で重要な位置を占めている。これらの叙事詩に古代ギリシア人が教育的価値を見出していたことは、古代ギリシア人自身の叙述によって知られる。プルタルコスは、『リュクルゴス伝』において、リュクルゴスが諸国を旅する途中、ホメロスの詩をはじめてみて、そこに、政治的教育的な要素が含まれていることを知り、熱心に写し集めてスパルタに持

ち帰ろうとしたことを述べ、リュクルゴスがホメロスの詩を有名にした最初の人であると指摘している(Plut. Vit. Lye. 4. 4)。また、クセノパネスの断片に、「はじめからすべての人はホメロスに従って学んだ」(DK21B10)という言葉がみられ、プラトンは、『国家』において、ホメロス賛美者の言葉として、「この詩人その人がギリシアを教育してきたのだ。人間的な事柄を統御し教育するには、この詩人を心に留めて学び、この詩人に従って自らの生活すべての備えをして生きるべきなのだ」(Pl. Resp. 10. 606e)という言葉あげている。また、さらにクセノポンは、『饗宴』のなかで、ニコラトスの言葉として、「私の父は、私を立派な人間にする事に気を配っていたが、その方法として、ホメロスのすべてを暗記することを私に強いた。それで私は今、ホメロスの『イリアス』と『オデュッセイア』のすべてを諳んじることができるのだ」(Xen. Sym. 3. 5)という言葉を残している。この古代ギリシア人たちの言葉からは、ホメロスの叙事詩を学び諳んじることが、すなわち彼らの生活の規範を得ることであるとする思想がうかがえる。このことについて、Werner Jaeger は、ホメロスの叙事詩の教育的価値を詳細に論じ、ホメロスを教育者と位置づけ、彼を最初の、最も偉大なギリシア人の生活と性質の創造者であり形成者であるとしている¹。また、Henri-Irénée Marrou は、ホメロスが教育上基本的なテキストとして用いられ続けたのは、ギリシア的理念の中心に騎士の倫理が生き続けていたからであり、ホメロスの叙事詩が学ばれ続けたのは、その内容が倫理の手引き、理念の綱領となったからだと指摘している²。彼らが指摘するように、ホメロスの叙事詩は優れた文学としての美的芸術的価値ゆえに学ばれたというよりもむしろ、

古代ギリシア人の生活の倫理的指針を示すものとして学ばれたということがわかる³。ホメロスの叙事詩の教育的価値は、生活規範を形成する力があることにこそ存するのである。

さらに、『イリアス』において、具体的な「教育」の場面として読み取ることが可能なのが、『イリアス』第9巻のアキレウスに対する師傅ポイニクスの語りである。もとより、ポイニクスは、今日的な意味における学校教師ではない。アキレウスの幼児期からの養育者であり、さらに、アキレウスが長じてからは教師として、アキレウスの全人的な成長を促す役割を課せられた人物である。以下、『イリアス』第9巻のポイニクスの語りを概観し、その位置づけについて考察したい。

2. ポイニクスの語り⁴

『イリアス』第9巻は、ギリシア随一の英雄アキレウスがアガメムノンに対する怒りのために戦列を退き、そのために苦戦を強いられているアカイア勢が、アキレウスに対して、3人の戦列復帰歎願の使者を送る次第が描かれた巻である。ポイニクスの語りに至る詳細は以下の通りである。

アキレウスを欠いたアカイア勢は、トロイア勢の攻勢にあい、苦戦を強いられている。集議の結果、苦戦の原因が、もとはと言えばアガメムノンがアキレウスから愛妾ブリセイスを奪ったためにアキレウスを怒らせ、怒りのあまり彼が戦列を離れたことにあるということになる。そして、老ネストルの説得により、アガメムノンがアキレウスに対して、和解と戦列復帰歎願の使者を送ることになる。その使者に選ばれたのが、知略に富むオデュッセウスと剛勇無双のアイアス、そして幼い時からアキレウスの師

1 Werner Jaeger, *Paideia: the Ideals of Greek Culture*, Volume I, second edition (translated by Gilbert Highet) (Oxford: Oxford University Press, 1945), pp. 35-56.

2 Henri-Irénée Marrou 『古代教育文化史』(横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳)(東京: 岩波書店, 1985年), 20頁。(原書名: *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*. Paris: Édition du Seuil, 1948).

3 我が国では教育学の立場から石山脩平が、ホメロスの叙事詩の教育学的考察によって、ギリシア教育史の時間的ならびに内容的な始源を把握することができるとして、『イリアス』の内容を教育史的に詳細に分析している(石山脩平「ギリシャ教育史における『イリアス篇』の意義について」乙竹岩造先生喜寿祝賀会編『乙竹岩造博士喜寿記念論文集 教育学と教育史学』(東京: 東洋館出版社, 1952年), 411-441頁)。

4 以下、『イリアス』の原典には、Thomas W. Allen 校訂の OCT 版を使用し、呉茂一訳と松平千秋訳(ともに岩波文庫)を参照した。

傳であった老ポイニクスである⁵。

アキレウスの陣屋に赴いた一行は、まずオデュッセウスが、アキレウスに戦列に戻ってくれるようにとの歎願の趣旨を伝え、アガメムノンの約束した莫大な贈物の内容を述べる。アキレウスはそれを拒絶し、自らの怒りの内容を語る。それは次のような内容である。死にもものぐるいで戦って戦功をあげても何もなくても分け前が同じであり同じように死ぬのだから、どれほど苦しい思いをしてもなんの得もない。総大将のアガメムノンは感謝の気持ちを述べるどころか、戦利品の多くを分配もせずに自分のものにしてしまう。もとはといえば、トロイアに戦いに来ているのは、アガメムノンの弟メネラオスの妻ヘレネのためである。にもかかわらず、アガメムノンは、他の者からは奪わないのに、自分（アキレウス）からは愛するブリセイスを奪い取った。そのことは許せないとアキレウスは語る。あわせて、アキレウスはここで、母親である女神テティスから自らの運命の予言を聞いていることを述べる。すなわち、このままトロイアの町を攻めつづけるならば、帰国の望みは絶たれるが、不滅の名誉が残る。しかし、帰国すれば、名誉は得られないが、命を永らえることができるという予言である。そして、所詮イリオス城の陥落を見ることはできないのだから他の者たちにも帰国を勧めたいと述べ、アキレウスは全く歎願を受け入れようとはしない。

ここにおいて重要なのは、アキレウスが、死の運命を背負ってそのことを自覚したうえで戦いに来ているということである。ギリシア勢のために命を惜

しまず他に抜きんでた戦功をあげたにもかかわらず、短命とひきかえに得られるはずの名誉もアガメムノンに踏みにじられたことを彼は怒っている。アキレウスの、そして当時の英雄たちの倫理観、何よりも名誉を重んじ、不滅の名誉が与えられるならば自らの命とひきかえにしてもよいというその倫理観を踏みにじったのが、アガメムノンである。名誉を踏みにじられた怒りの大きさゆえに、アキレウスはアガメムノンの歎願を受け入れようとはしない。しかし、このアキレウスの態度に、当時の倫理観からの逸脱と超克の可能性を見出すこともできる。それは、女神テティスが示したもうひとつの道、すなわち、名誉はないが平穩に命永らえる生き方、ここでは戦列を離れて帰国することへの希望である。ここに、青年アキレウスがその怒りのなかで、女神テティスの示したふたつの運命の前で迷っている姿を見出し得るのである。

オデュッセウスの説得を拒否するアキレウスの言葉の激しさに、その場にいた者たちは、一同驚きのあまり黙り込んでしまうのだが、そのような状況のなか、ポイニクスは涙ながらに語り出す。この語りが本論文の対象としている語りである。古来、彼がパイダゴゴスの鑑として賛美されているのは、この語りのゆえである。ポイニクスの語りは、三段構成の説得演説の形をとっている⁶。以下、ポイニクスの語りの概要を述べる。

まず、その最初の段で、彼自身がアキレウスの養育係になった経緯を語る。アキレウスを幼い時から我が子のように慈しみ養育してきた思い出である。

-
- 5 ポイニクスがこの使節の一員であったことの真正性については、古くから疑問が呈せられている。その主たる理由は、3人の使節の道行きの場面で、動詞の双数形が使われていることにある。しかし、Jaeger, op. cit., pp. 26-27 はポイニクスのこの語りがこの場面において、欠くべからざるものであることを詳細に論じている。また、例えば、Rosner, J. A. “The speech of Phoenix: *Iliad* 9: 434-605,” *Phoenix: the journal of Classical Association of Canada*, 30(4), 1976, pp. 314-327, は、このポイニクスの語りと『イリアス』全編との関連性を詳細に分析し、この語り、叙事詩全体において欠くことのできない要素であるとしている。また、C. J. Mackie, “Achilles’ teachers: Chiron and Phoenix in the *ILIAD*,” *Greece & Rome, Second Series*, 44(1), 1997, pp. 1-10, は、ポイニクスの役割を、同じく神話上アキレウスの教師であったとされるケンタウロスのケイロンの役割と比較し、ポイニクスがになった教育は、戦場と弁論におけるコミュニティースキルの教育であるとし、ケイロンは、野生における独立独行の技術（医術や狩猟など）を教えているとして両者を対比した上で、『イリアス』では、人間的なものに重点を置く必要から、ポイニクスに優先的な地位が与えられているが、ケイロンはその影を減しながらも存在しており、アキレウスの子ども時代の共同体からの分離と孤立への衝動という形で我々の目に映るとしている。
- 6 久保正彰「古典古代における子どもの発達と教育—ホメロスの両叙事詩を中心として—」, 大田堯他編『岩波講座子どもの発達と教育 2 子ども観と発達思想の展開』（東京: 岩波書店, 1979年）, 112頁。

ポイニクスは、その父アミュントルとの間で起きた父の妾を原因とするいさかひの結果、父から、ポイニクスの子どもは決してポイニクスの膝に座らせない、すなわち、生涯子どもをもつことができないという呪いを受けた。ポイニクスは、父に対して激しい怒りを感じ、父との争いを避けるためヘラスを離れ、プティエの地に赴き、ペレウス王のもとに身を寄せた。彼を快く受け入れたペレウス王の計らいで、彼はドロペス族の王となり、ペレウスの子アキレウスの養育を任されることとなった。ポイニクスは、幼いアキレウスを養育し、アキレウスとともにアガムノン率いるアカイア勢の一員としてトロイア戦争に参加する時も、その世話を任されて従軍したのである。アキレウスの出陣に際し、まだアキレウスが若く、戦いのことにも、男たちがその卓越性を示す場である集会のことにも通じていなかったため、ペレウスはポイニクスに付き添いを依頼したのである。その際、ポイニクスは、ペレウスからアキレウスを弁論巧みな者となるように、そして武功を立てる者となるようにとの依頼を受けたと語る。

第2段の冒頭、ポイニクスは、アキレウスに対して、「激しい怒りを抑えよ」と勧告し、アテ（迷妄）とリタイ（歎願）の女神の神話を寓意的に語ることで、迷妄に陥って犯した罪と歎願者に対する取るべき態度を教え、歎願は受け入れるべきものであると諭す。

そして、最後の段で、英雄メレアグロスのパラダイグマ（範例）を話して演説を終える。ポイニクスがここで語るのは、メレアグロスを中心とするカリュドンの猪狩りと、その後の猪の首と毛皮をめぐるアイトロイ人とクレテス人との争いがもとで両者の戦いが起こった次第である。メレアグロスはアイトロイ人側で剛勇をふるっていたが、彼が母の兄弟を殺したがゆえに母から呪いを受けていたことを知ると、メレアグロスは戦場を離れ、自らの陣屋にひき

こもり、妻クレオパトレのもとに臥せってしまう。彼の不在のために戦況が苦しくなったアイトロイ人たちは、次々と莫大な贈物を携えた歎願者を送るが、彼はそれらをすべてしりぞけて受け入れない。やがて、クレテス人は、アイトロイ人の町に火を放ち始める。結局自らの陣屋にも戦火が及ぶにいたって彼は、妻クレオパトレの説得に従って戦場に戻る。メレアグロスは自らの心のままに戦い、アイトロイ人たちに破滅から救うのであるが、もはやアイトロイ人は約束した贈物は贈らなかったという話である。

この話を終えて、アキレウスに対して、贈物がもらえるうちに、戦いに出てもらいたい、もし、贈物をももらえぬ段になってから戦場に出たら、たとえ戦禍を防いだとしても同じ名誉は得られないであろうと述べ、ポイニクスは長い語りを結ぶ。

このポイニクスの語りかけに対して、アキレウスは、次のように言う。そのような名誉はいらない、自分はすでにゼウスによって名誉を受けている。その名誉は、生きている限り自分と共にある。アガムノンに忠義立てして嘆いたり悲しんだりして、自分（アキレウス）の心を乱さないでもらいたい。もしも自分に嫌われたくなかったら、アガムノンに好意を示してはならない。自分の王権を半分譲るから、自分と対等に国を治めてはどうか。ここに残って、国許にひきあげるか、ここに留まるかを相談しよう。この言葉で分かるように、アキレウスの態度はややおだやかにはなつたものの、ポイニクスの説得をもってしても歎願を受け入れることはなかった。このポイニクスとアキレウスのやりとりの後、アイアスは、この説得は成功の見込みはなさそうだと言いつつも直截にアキレウスに心を静めるように促すが、やはりアキレウスの心は変わらず、帰ってダナオイ勢に事の次第を報告するようにと言う⁷。

以上、ポイニクスの語りを概観してきたが、『イリアス』のなかで、ポイニクスが重要な役割を担う

7 小川政恭『『イリアス』IX 312-313の解釈を中心として』『西洋古典学研究』第16号、1968年、13-23頁、は、社会構造の変質の面から、アキレウスとアガムノンの対立を解釈する。アキレウスの説得拒否の理由を、アキレウスが典型的武力王であり、英雄の名誉（τιμή）を目標として参戦しているのに対して、他の諸王をアガムノンの従属者であるとみなしているためであると指摘し、アキレウスが、ゼウスによってすでに名誉を受けていると述べるのは、権力によって連合軍に組み込まれなくても単独でゼウスに守られ光栄を保っているという意識であると述べる。

のはこの箇所だけである⁸。しかし、この語りは、アキレウスの怒りをめぐる『イリアス』全篇のストーリー展開と密接な関係をもっている。

3人の使者のアキレウス説得とその失敗は、その後の叙事詩の展開に対して、重要な結節点となる。この説得の失敗の結果、アキレウス不在のまま、トロイア戦争は進行する。そして、ギリシア勢の劣勢を挽回するために、アキレウスの鎧を着けて彼の身代わりとして戦場に出た彼の親友パトロクロスがトロイアのヘクトルに討たれることとなる。パトロクロスの戦死を受けてはじめて、アキレウスは親友を失った悲しみとともに、アガ멤ノンに対する怒りを捨てて戦列に復帰する。それは、アキレウスが自ら死の運命を選びとったことを意味する。アキレウスはヘクトルを討ち、パトロクロスの敵討ちを果たす。アキレウスは、自らの怒りへの後悔と親友を失った悲しみのあまりヘクトルの遺骸を辱めるが、アキレウスの陣屋を単身訪ねてきたプリアモス王の勇氣と息子を失った父親の悲嘆に心動かされ、ヘクトルの遺骸を引き渡す。そして、プリアモスはトロイアに戻り、トロイアで営まれたヘクトルの葬儀の場面で『イリアス』は幕を閉じるのである。

3. ポイニクスの教師像

先に概観したポイニクスの語りについて、ポイニクスのパイダゴゴスとしての特徴を分析し、ポイニクスの教師像として特徴的であると考えられるものを6つの観点から考察する。

(1) 「言葉」と「行い」の教師

ポイニクスは、「言葉」と「行い」の教師である。それは、ポイニクスの語りのなかの、ペレウスがポイニクスに我が子アキレウスの教育を託す言葉に明示されている。すなわち、「弁論巧みな者となるように、そして、武功を立てる者となるように」という

ペレウスのポイニクスに対する依頼の言葉である⁹。

τοῦνεκά με προέηκε διδασκόμεναι τάδε πάντα,
μύθων τε ῥητῆρ' ἔμεναι πρηκτῆρά τε ἔργων.

(それゆえ、彼〔ペレウス〕は私を、あなたにそれらすべてを教えるようにと遣わしたのだ、
弁論巧みな者となるように、そして、武功を立てる者となるように。)

(*Il.* 9. 442-443)

つまり、集議の場において、きちんと弁論をすることのできる「言葉」の教育、それに、戦場において、勇敢な振る舞いができるという「行い」の教育の両方をペレウスはポイニクスに託しているのである。そして、オデュッセウスの歎願に対するアキレウスの怒りに満ちた言葉を聞いたポイニクスは、それに対して、怒りを抑えよという強い勧告とアテとリタイの神話によって、他人に辱めを受けて怒りの感情をもつのは許されるとしても、その他人がひとたび過ちを認め歎願の姿勢を取る時、その謝罪とその印である贈物は受け入れるべきであるという行動規範、すなわち、この状況下で語るべき「言葉」と取るべき「行い」を明確に示すことで、ペレウスの負託に応えているのである。歎願の使者をねぎらい、アガ멤ノンの提供する贈物を受け取って歎願を受け入れ戦場に戻るとというのが、ポイニクスが、アキレウスに期待する「言葉」と「行い」なのである。ポイニクスも、彼の語りに先立つアキレウスの話を聞いているわけであるから、女神テティスの予言も聞いている。それゆえ、歎願を受け入れてアキレウスが戦場に戻れば、彼が命永らえることはできないことを知っている。そのことを知りつつ、ポイニクスはなお、社会のなかで、いかに語り、いかに振舞うべきかを青年アキレウスに対して説く。青年アキレウスの怒りに寄り添いつつも、しかし、彼の不在がもたらしているアカイア勢の窮地、そこでもたらされ

8 この箇所以外では、*Il.* 16. 196 に、パトロクロス出陣の際の第4隊の隊長として名前があがり、*Il.* 19. 311 には、パトロクロスを失って悲嘆にくれるアキレウスを慰めようとアキレウスのもとに留まる者として名前があがり、*Il.* 17. 555 で女神アテネが、ポイニクスの声を借りて、パトロクロスの遺体を守り全軍が踏みとどまるよう鼓舞するようにメネラオスに説く場面がある。

9 Jaeger, op. cit., p. 8, は、この詩句を、ギリシアの教育理想と人間の可能性の総体を表現する努力を最も早く定式化したものと後のギリシア人が捉えていたとして、後世への影響も含め、詳細に論じている。

ている不幸、失われていく多くの命に目をむけさせ、アキレウスの怒りに同調することなく、彼の進むべき道を指し示すのである。

この「言葉」と「行い」の教師ということについて、キケロは興味深い見解を示している。彼は、『弁論家について』において、ポイニクスを教育者の在り方の転換点として引き合いに出すのである。正しく行うことの教授もよく話すことの教授もかつては同じ教授体系にあり、教授する者も分かれてはおらず、生きることと語ることの教師は同一人物であったと述べ、ポイニクスが、戦場に向かう若きアキレウスに付き添って言葉をよく話す者に、事を為す者にするように、ペレウスから依頼を受けたことをその例としている (Cic. *De or.* 3.57)。さらにキケロは、「行い」の知恵と「言葉」の知恵の乖離がソクラテス以後始まったと説き、それはまったくばかげた無益な非難されるべき乖離であるとしている (Cic. *De or.* 3.59-61)。ここには、「言葉」と「行い」の両面において同じ人物が模範となるべきものであるべきだとする考え方が現れており、時代が下るにつれて、それらが乖離してしまったことを嘆く姿勢が読み取れる。キケロは修辞学を重視するソクラテスの教養理念、すなわち「言葉が、行いと思慮すべてを導く」 (Isoc. *Antid.* 257) とする考え方を受け継いでいる¹⁰。それゆえにこそ、「言葉」の教師であり、「行い」の教師でもあるというポイニクスの教師としてのあり方に教師としての理想を見出していると考えられる。

同じく、修辞学を重視するクインティリアヌスも、『弁論家の教育』において、ポイニクスに触れている。教師は、言葉と徳において最も卓越していなければならない、ホメロスにおけるポイニクスの例にしたがって、話すことと行うことを教えるべきだと述べている (Quint. *Inst.*, 2.3.12)。クインティリアヌスも、ポイニクスを例にあげて弁舌と人格の双方に優れた「言葉」と「行い」の両面の教師であることを教師の理想像としているのである。

自らが模範と成り得る深い教養をもった、「言葉」

と「行い」をともに教えることのできる教師、これはポイニクスの教師像の重要な側面である。

(2) 我が子を慈しむように子どもを慈しむ教師

ポイニクスのもうひとつの特徴は、アキレウスに対する深い愛情である。幼い時から慈しみ育ててきたことは、この語りにおいて、彼自身の口から情感豊かに語られている。この親子の情愛にも似た師弟の関係が成立するのは、ポイニクスの過去にその理由がある。

ポイニクス自身が語りのなかで明らかにしているように、彼は、父アミュントルの呪いによって、生涯子どもをもつことができないという運命を背負わされている。ポイニクスは自分が決して父親にはなれないというその運命のゆえに、それだけになお一層、彼の父性はアキレウスに向かい、アキレウスを我が子のように慈しむのである。一方、幼いアキレウスはポイニクスによくつき、宴会に招かれた時には、ポイニクス以外の人とは行きたがらず、家での食事の時には、ポイニクスが膝に座らせて食べさせなければ飲みも食べもしないというありさまであった (Il. 9.486-491)。そのようなアキレウスを、ポイニクスは、「わたしはあなたを自分の子にしたいと考えた」 (Il. 9.494-495) と言い、その理由を、アキレウスなら自分を不名誉な破滅から救ってくれるであろうからだという。

アキレウスの方としても、長い語りを終えたポイニクスに対して、「老いたる師父よ (ἄρτα γεραίέ)」 (Il. 9.607) と呼びかけて、歎願は受け入れないものの、自らの王権の半分を譲るから自分と対等に国を治めてはどうかと誘う。そして、アキレウスの陣屋に留まるように促す。

この両者のやりとりからは、幼い時から父親のように成長を見守ってきた師傅に対して、成長して青年となったアキレウスが、その恩にむくい孝養を尽くそうとする気持ちがみえてくる。

単なる教える者と教えられる者との関係を超えた、親子の情愛をも感じさせる光景をホメロスは描き出

10 廣川陽一『ソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉—』(東京: 岩波書店, 1984年), 240-251頁。

すのである。ポイニクスに父親としての役割を重ねあわせることで、彼の教師像は奥行のあるものとなっている。『イリアス』の詩人の意図は、以下のことから推定される。

ポイニクスにかけられた呪いの結果については、アポロドロスの『ギリシア神話』にまとまった言及があるが、その次第は、『イリアス』とは異なっている。そこでは、ポイニクスは生涯子どもをもてないという呪いを受けたのではなく、呪いによって盲目にされたことになっており、盲目になったポイニクスを、ペレウスがケンタウロスのケイロンのとこに連れていって治癒させたことになっている (Apollod. *Bibl.* 3. 13. 8)。アリストパネスの『アカルナイの人々』にも、わずかだが、ポイニクスの盲目についての言及がある (Ar. *Ach.* 421)。

このことから考えると、ホメロスが選択したポイニクスの運命は、やがて治癒する、すなわち呪いからの解放を前提とされた盲目ではなく、永遠に呪いから解放されることのない、父親にはなれないという運命である。父親になれない運命を自覚するがゆえに、子どもをもちたいという強い願望を抱き、養育する幼いアキレウスに我が子に対するが如き愛情を注ぐ、ポイニクスの教師像にはそのような強い父性が加えられているのである¹¹。このことは、ポイニクスの教師像を考える際に、重要な側面であると考えられる。教師の教育者としての愛情のなかに、我が子に対するが如くに子どもを慈しむ心情をあわせもった教師像が創出されているのである。

(3) 自らの弱みを隠さない教師

ポイニクスの語りの冒頭には先に概観したように、自伝的な語りがある。彼はそこで、教師としては倫理的にふさわしくないとと思われるような自らの過去を開陳している。それは以下の部分である。

τὸν μὲν ἐγὼ βούλευσα κατακτάμεν ὄξει χαλκῶ
ἀλλὰ τις ἀθανάτων παῦσεν χόλον, ὅς ῥ' ἐνὶ θυμῷ
δήμου θῆκε φάτιν καὶ ὄνειδεα πόλλ' ἀνθρώπων,
ὡς μὴ πατροφόνος μετ' Ἀχαιοῖσιν καλεοίμην
(私は、鋭い剣で父を殺そうと謀った。

しかし、不死の者のだれかが私の怒りを鎮めて下さった。わが心に民衆の声や多くの人々の非難を呼びおこし、

アカイア人のなかで父殺しと呼ばれることがあってはならぬと。)

(*Il.* 9. 458-461: Plut. *Mor. Quomodo adulescens poetas audire debeat*, 26f)

この4行の詩句は、『イリアス』の写本そのものには伝承がなく、プルタルコスの『モラリア』の一篇である「詩の読み方」に引用されているために残った詩句である。プルタルコスはこの詩句を引用したうえで、ホメロスのテキスト校訂者アリストアルコスが、この詩句に恐れをなして、この詩句を削除したと述べている。しかし、プルタルコス自身は、この詩句は、機会を捉えたという意味では正しいとしている。つまり、ポイニクスが、怒りとはどのようなものか、理性を用いないならば、また、なだめようとする人に耳を傾けないならば、どれほどの野蛮なことを人は怒りから引き起こすかをアキレウスに教えようとしているからだとする (Plut. *Mor. Quomodo adulescens poetas audire debeat*, 26f-27a)。プルタルコスは、この詩句について、同じく『モラリア』の一篇「追従者の見分け方」においても、ポイニクスが自分自身の不幸を語り、自分の父親を殺そうとしたがすぐに翻意したことを語ったのは、ただ単純に語ったわけではないと述べている。そして、同じ箇所(1行 (*Il.* 9. 461))を引いて、これは、ポイニクス自身が怒りにも駆られず過ちも犯さない者としてアキレウスに忠告しようとしていると思わせな

11 Jaeger, op. cit., p. 27, はポイニクスの語りを教師が生徒に語る説得演説の模範であるとしているが、D. Lohmann, *Die Komposition der Reden in der Ilias* (Berlin: Walter de Gruyter, 1970), S. 248-252, は、ポイニクスは本来教師としての役割ではなく、父としての役割をもつ者として描かれているとする。G. F. Held, "Phoenix, Agamemnon and Achilles: Parables and paradeigmata," *The Classical Quarterly. New series*, 37(2), 1987, pp. 245-261, は、ポイニクスの語りにおける歎願には二重の意味があり、教育的理想を求めると父性的情愛に発するものとが分かちがたく混在しているとする。

めに語られているとしている (Plut. *Mor. Quomodo adulator ab amico internoscatur*, 72b)。

このプルタルコスの解釈に従えば、ポイニクス自身もアキレウスと同じく、激情に駆られ過ちを犯す人間であることを敢えて明らかにすることで、師傅として論ずというよりも同じ弱さを共有する人間として助言するという姿勢を、ポイニクスがみせているということになる。

この点も、ポイニクスの教師像として重要な点である。自らの弱みを自覚し、自らの倫理的欠点を隠すことなく明らかにして、同じ弱さをもつ子どもの心に寄り添いながらよりよい道を助言しようとする教師の姿を、ポイニクスの教師像として指摘できるのである。

(4) パラダイグマ (範例) をもって語る教師

ポイニクスが、メレアグロスの神話というパラダイグマを用いてアキレウスを説得するところにも、彼の教師としての特質をみることができる。Jaeger は、パラダイグマの教育的意義を説き、英雄物語が新しい世代にとっての遺産であり着想の源である精神的な豊かさを含んでいると述べ、ポイニクスの語るメレアグロス神話を例にあげ、ポイニクスが、いにしえの時代と英雄に対して敬意をこめてアキレウスに語っていることを指摘している¹²。Marrou は、ホメロスの教育の秘密はパラダイグマにあるとして、ホメロスを紹介して、「英雄のまねび」を伝えたという深い意味において、ホメロスがギリシアの教師だったと述べ、その例として、ポイニクスをあげている¹³。

ポイニクスの語るメレアグロス神話に着目してみると、この神話には別の筋立てがある。バッキュリデスによると、メレアグロスの母の呪いは、母が箱にしまってあったメレアグロスの運命の燃え木を火にくべるとすぐに実現し、メレアグロスは戦場で闘

いながら突然、命尽きるのである (Bacchyl. *Ep.* 5. 94-154)。すなわち、メレアグロスが怒りのために妻クレオパトレのもとに留まって戦場に出ないというような筋立ての入り込む余地はないのである¹⁴。この神話の筋立ての違いを考えると、ポイニクスのメレアグロス神話は、アキレウスが置かれている状況と合致した形で語られていることが分かる¹⁵。それは、この神話がパラダイグマとしての教育的効果をもつためには、英雄が自分と同じように怒りを覚え、同じように戦場を退いたという状況が必要であったからであろう。ポイニクスの語る神話がこの筋立てであってこそ、教師が語るパラダイグマとしてふさわしい価値をもつのである。すなわち、ポイニクスはただ英雄物語をパラダイグマとして用いているのではなく、パラダイグマの教育的価値を最大限に活かすために、教育の状況に適合したパラダイグマを選んで、あるいは創造して語っているのである。このように、ポイニクスは効果的なパラダイグマを語ることのできる教師として描かれていることができる。

(5) 既存の社会規範や倫理の枠組を守る教師

ポイニクスの語りは、ペレウスの彼に対する依頼の通り、「言葉」と「行い」を教えようとするものであった。そして、当時の英雄たちの倫理観に合致した「言葉」と「行い」こそが、その教育的理想として捉えられていた。ここで問題になっているアキレウスの行動に関しては、ポイニクスの語るアテトリタイの神話はその場における望ましい行動規範を示唆するものであった (*Il.* 9. 499-514)。すなわち、罪を犯した者が歎願の姿勢を示した時にはそれは受け入れるべきであるという倫理であり、この場合、先に述べたように、怒りを鎮め、アガ멤ノンの贈物を受け取ることで歎願を受け入れ、戦場に戻るという行動が、アキレウスに期待されていることにな

12 Jaeger, *op. cit.*, pp. 32-33 et pp. 40-41.

13 Marrou, 前掲書, 23-24 頁.

14 M. M. Willcock, *Homer: Iliad Book I-XII*, (London: Bristol Classical Press, 1996, first published in 1978), pp. 281-282.

15 B. Hainsworth, *The Iliad: A Commentary*, volume III: books 9-12, (Cambridge: Cambridge University Press, 1993), pp. 130-132.

る。そして、その行動規範は、もしも歎願を拒むならば、それはゼウスの娘リタイに対する不敬神であり、今度は逆にその拒んだ者の方が罪を負い、ゼウスがその者に償いを要求することになるという理由から導かれるものである¹⁶。

アキレウス自身は、名誉を命よりも重んじる倫理観をもっている。しかし、その名誉がアガ멤ノンによって踏みにじられたことへの怒りから、オデュッセウスの伝えたアガ멤ノンの和解の申し出と歎願は受け入れず、女神テティスの予言にある第二の道、すなわち、名誉は与えられないが命永らえる道、すなわち帰国の道を選びたいと語るのである。怒りのゆえに、歎願を受け入れないこのアキレウスの姿勢は、アカイアの軍勢に多大な犠牲を強いている。これは、彼の倫理観すなわち当時の英雄たちの倫理観から導かれた姿勢でありながら、同時に、当時認められていた行動規範とは対立する姿勢である。アキレウスが怒りのあまり、冷静な判断力を失い、守るべき倫理や行動規範を喪失してしまったとみることもできよう。しかし、角度を変えてみれば、アキレウスが既存の倫理観を超えて、戦いによって得られる名誉の虚しさを命の重みと比して述べる、そこにおいて彼の名誉は、アガ멤ノンやアカイア勢から得られる名誉ではなくして、ゼウスによって与えられる、しかも自分から離れることのない名誉であるという、新しい倫理の地平に立ったとみることもできよう¹⁷。このような姿勢をとるアキレウスに対して、ポイニクスは、女神テティスの予言を聞き、彼が戦列に戻れば短命に終わることも知りつつ、彼に怒りをおさめ、謝罪と歎願及びその印としての贈物

を受け入れ、戦列に復帰することを促す。つまり、既存の倫理観に立ち返ることを要求しているのである。このポイニクスの姿勢に対して、プラトンは『国家』において、興味深い批判を展開している。「贈物を受け取ったならアカイア勢を助けてやるがよい、贈物がないならば怒りを解く必要はないとアキレウスに忠告したアキレウスの師傅ポイニクスなど賞賛すべきではない」(Pl. *Resp.* 3. 390e) と言うのである。プラトンの残している言葉は、ポイニクスの説得の主旨を反映したものではなく、ホメロスその他の詩人たちへの批判の文脈から、あえて曲げて語られているようである。しかし、プラトンの批判は、ポイニクスが既存の価値観から一歩も抜け出していないことに彼の限界を感じ取ったゆえの批判とすることも可能であろう。

ポイニクスの教師像について、これを既存の倫理観から抜け出ることのできない教師像と解釈することもできる¹⁸。しかし、生徒が教師の教える倫理観や行動規範を超えて成長しようとする時、教師はいったいどんな言葉を彼に掛けることができるのか。そのような時、教師は、ポイニクスのように、涙を流しながら、あくまでも既存の倫理観や行動規範を繰り返し述べて説得しようとするしかできないのではないか、いや、むしろそうすべきではないか。ポイニクスの教師像は、我々に教師の限界についての考察を迫っている。

(6) 意を尽くして語っても、教え子に受け入れられることのない教師

最終的にポイニクスの語りは、アキレウスには受

16 高橋通男「『イーリアス』第9巻499-512行の解釈— $\tau\mu\eta$ の考察を通して—」『西洋古典学研究』第21号、1973年、29-34頁、は、ポイニクスの語りを $\tau\mu\eta$ の享受を最高善とする英雄社会の経験に基づくものとし、ポイニクスのリタイ神話を、アキレウスがかたくなにリタイを拒むならば、リタイの $\tau\mu\eta$ を傷つけ、その報復を受けて償いをするようになるが、そのことをアキレウスが怒りのために顧慮しないならば、判断を誤ることになるという説得であると解釈している。

17 川島重成『『イーリアス』ギリシア英雄叙事詩の世界』(東京:岩波書店、1991年)、127-129頁及び242-245頁、は、この「名誉」について、ポイニクスの言う伝統的価値観に基づく名誉に対して、名誉はゼウスの与える名誉として新しく展開し、第24巻において、歎願者プリアモスの訴えを受け入れ、「互いに悲劇の担い手としての人間的共感のなかに相手の美しさ、気高さを認め感嘆しあう」新しい形をとるような誉れであると分析している。

18 同上書127頁、は、ポイニクスの説得は、アキレウスの名誉をめぐる苦悩に対する無理解を露呈しているとしている。また、N. Yamagata, “Phoenix’s speech—Is Achilles punished?” *The Classical Quarterly, New Series*, 41(1), 1991, pp. 1-15, は、アガ멤ノンの贈物の約束がアキレウスにとって何の意味もないことを使節のだれもが理解していないと指摘している。

け入れられない。ポイニクスの委曲をつくした語りをもってしても、アキレウスの怒りを解くことはできない。アキレウスの怒りは、ポイニクスのような師傳の説得によっても解けない。アキレウスを説得できないのは、その語りの不十分さにあるのではない。ポイニクスの語りは、十分にアキレウスの胸をうつはずのものである。ポイニクスの語る自身の過去、アキレウスの幼い頃の思い出話、怒りを鎮めよとの勧告、アテとリタイの神話、メレアグロスのパラダイグマ、いずれをとっても、若きアキレウスの心を動かさずにはおかないものである。それゆえ、アキレウスは、ポイニクスに、嘆いたり悲しんだりして、私の心を乱さないでほしい(II. 9. 612)と言っているのである。しかし、ポイニクスの語りには、アキレウスの「行い」を変える力はなかった。ここに、ポイニクスを教師としてみる場合、教育の極めて困難な、しかし本質的な一面が明らかになる。久保正彰は、「師がどのようにすぐれていても、また弟子がどのように生来の資質にめぐまれていても、人生の幸、不幸をわかつ岐路に直面したとき師は果して弟子に、人生の英知を訓しきかせ説得することが出来るのか——それとも人は自らの背負うた運命の道をひたすら歩むことによってのみ、真実を知り得るのか——」が『イリアス』の究極の問いかけであるとす。そして、この問いかけが「教育の永遠の課題」であるとしている¹⁹。また、教師が「言葉」と「行い」の教師であったとしても、そして、その教師が己のすべての能力をかけ心をこめて教育を行ったとしても、生徒の「言葉」と「行い」に影響を及ぼしうるとは限らない。このことは、教育という営みが、生徒にとってどのような意味をもつ営みなのかを考える時、教育が生徒にとって意味ももたないことがありうることを視野に入れることを迫るという意味で、教育の本質を問う問いであるといえよう。

まとめと今後の課題

これまで、ポイニクスの語りを通して、その教師像を6つの特質に分けて分析してきた。ポイニクス

は、先にも述べたように今日的な意味での学校教師とは全く異なる立場にある。ただ、子どもの世話を幼い時から行い、子どもが長じてからも、その言動や行動規範について教え諭す役割をもった存在であったという点においては、今日の生徒教師関係に通底するところがあると考えても、大きな間違いではないであろう。そこで、本論文のまとめとして、先にあげたポイニクスの教師像の特質が、現在の学校教師の在り方及び生徒教師関係に対してどのような示唆を与えうるかを提起して結びとしたい。

まず、「言葉」と「行い」の教師ということについては、これは、古典期ギリシア、それから下ってローマ及び西欧世界に影響を与えていった教師像である。「よく語ること」と「よく行うこと」を教えることは、イソクラテス的なピロソピアの概念ともつながり、西欧的な教育の在り方の一端を形成している。「言葉」と「行い」が別々のものではなく、よく語る事が、すなわち、よく行うことともつながっているというのが、理想的な教育のかたちとして永続しているのだと考えられる。「言葉」というものが単にコミュニケーションのための言語運用能力を担うものであるというのではなくして、「行い」を統御するものとして行動規範を形成するものであると捉えられるべきであるということを、ポイニクスの教師像は示唆している。

第2に、我が子を慈しむように慈しむ教師という点においてであるが、ポイニクスが教師としての側面とともに、心情的には父親としての側面ももつ存在であることは先に述べた通りである。ポイニクスは教師であると同時に父親の心をもつ存在として造形されている。このことは、教育的愛情が親の愛をその内実としてもつということが教師の理想として考えられていたということを示すものであろう。このことは、今日の学校教師における教育的愛情の在り方を考える際にも重要な示唆を与えるであろう。

第3に、自分の弱みを隠さない教師についてである。ポイニクス自らがかつて陥りそうになったのと同じ過ちに若きアキレウスが陥ろうとしているのを

19 久保正彰、前掲書、112頁。

見て、自らも同じ過ちを犯す可能性のあった人間であるということのアキレウスの前に吐露するポイニクスの姿からは、教師の人間的弱さが、教育的動機を伴って表明されていることに注意する必要がある。今日の学校教師にとっても、人間的弱さを露呈することは決して肯定されるべきことではない。しかし、教師がだれしももっている人間的な弱さが、明確な教育目的をもって生徒の前で表明されるとき初めて、それが教師の言葉としての意味をもつのだということ忘れてはならないであろう。

第4に、パラダイグマ（範例）をもって語る教師ということについてであるが、パラダイグマが古代の教育においては重要な意味をもって来たことはすでに述べた通りである。このことについて、今日的な視点から考察してみると、古代におけるパラダイグマを敷衍して考えれば、今日の学校教育においては、生徒に対するロールモデルの提示ということにつながっていくのではないかと思われる。現在の我が国の学校教育が、先人の生き方に学ぶという意味において、ポイニクスのパラダイグマに匹敵するようなロールモデルを果して提示し得ているかどうか、振り返ってみるべきであろう。

第5に、既存の社会規範や倫理の枠組を守る教師という点についてである。教師という存在は、既存の社会規範や倫理の枠組を次世代に伝える役割もっている。したがって、もし仮に生徒がその枠組を出て新しい社会規範や倫理の可能性を模索していたとしても、教師は、既存の枠組に踏みとどまり続ける、あるいは踏みとどまらなければならない存在である。教師は、その意味で生徒の前で未来に向けて十分な教育力を有した存在ではなくて、限界をもった存在であることを自覚すべきである。後世から俯瞰的にみて、たとえその教育者の行った教育が、陳腐で凡庸なものに思われたとしても、既存の社会規範や倫理の枠組を超えること、あるいは超えようとすることは教師のなしうる、あるいは、なすべき仕事ではない。社会規範や倫理は、すでに安定した価値をもつものである。未知の変革を信奉して子どもを道徳的危機にさらすことは、教師の役割ではない。そのことをポイニクスの教師像から学ぶことができ

る。

最後に、意を尽くして語っても教え子に受け入れられることのない教師の姿にこめられた意味を考えてみたい。教師は生徒に、自らのよしとする「言葉」と「行い」とを与えようとする。しかし、生徒がそれを受け入れるとは限らない。とくに、自らの意志で自らの歩むべき道を探ろうとしている青年にとって、教師の言葉は必ずしも受け入れられるとは限らない。いやむしろ、ポイニクスの語りがアキレウスを説得できなかったように、教師の語る言葉が生徒に作用するかどうか、あるいはどのように作用するかは、明確には予測できないのである。これは、教育に従事する者が常に心に留めておかなければならないことである。ある理想的な教育体系を整えることができたとして、その教育体系が論理的に考えて優れた人間を育てるに足るものであったとしても、しかし、その教育体系が優れた人材を輩出するという保証はどこにもない。あくまでも、教育は、生徒教師関係という人間関係のなかでのみ成立するものであって、人と人とのかかわりのもつ不確かさのなかで営まれているということをおぼろげに忘れてはならないであろう。そのことをポイニクスは教えてくれるのである。

以上、6つの点について、ポイニクスの語りにみる教師像を、現代の学校教育になぞらえて考察を巡らせてみたが、もとより、これはひとつの解釈にすぎない。ポイニクスの語りもまた多様に解釈される可能性をもっている。ただ、人間の営みとしての教育及びそれを担う教師の普遍的な役割に価値を見出すならば、古い時代の教師像のひとつの典型と捉えられてきたポイニクスの教師像は、現代の教師像を考える上でも有益な示唆を与えうるであろう。

本論文では、『イリアス』第9巻のポイニクスの語りに焦点をあててその教師像について検討してきたが、このポイニクスとアキレウスの師弟関係と、『オデュッセイア』において、ポイニクスとアキレウスの関係と対比して考えることのできる、テレマコスと彼の助言者メンテス及びメントルとの師弟関係及び彼らの言動にみられる教師像を比較考察することによって、両叙事詩における教師像をより鮮明

に描き出し、その教師像が現代の教育に対してもつ意味を吟味していくことを今後の課題としたい。また、他のギリシア・ローマの古典作品にみられる教育あるいは教師の姿に少しずつ光をあてながら、現代の教育の道標となるべき要素を見つけ出していくことも今後の課題としたい²⁰。

参考文献

- Brenk, F. E. "Dear child: The speech of Phoenix and the tragedy of Achilles in the ninth book of the Iliad." *Eranos: Acta Philologica Suecana*. 84, 1986, pp. 77-86.
- Hainsworth, B. *The Iliad: A Commentary*, volume III: books 9-12. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Held, G. F. "Phoenix, Agamemnon and Achilles: Parables and paradeigmata." *The Classical Quarterly, New series*. 37(2), 1987, pp. 245-261.
- 廣川陽一『イソクラテスの修辞学校—西欧的教養の源泉—』東京: 岩波書店, 1984年。
- 石山脩平「ギリシャ教育史における『イリアス篇』の意義について」乙竹岩造先生喜寿祝賀会編『乙竹岩造博士喜寿記念論文集 教育学と教育史学』東京: 東洋館出版社, 1952年, 411-441頁。
- Jaeger, W. *Paideia: the Ideals of Greek Culture*, Volume I, second edition, translated by Gilbert Highet. Oxford: Oxford University Press, 1945.
- 川島重成『『イーリアス』ギリシア英雄叙事詩の世界』東京: 岩波書店, 1991年。
- 久保正彰「古典古代における子どもの発達と教育—ホメロスの両叙事詩を中心として—」大田堯他編『岩波講座 子どもの発達と教育 2 子ども観と発達思想の展開』東京: 岩波書店, 1979年, 98-125頁。
- Lohmann, D. *Die Komposition der Reden in der Ilias*. Berlin: Walter de Gruyter, 1970.
- Mackie, C. J. "Achilles' teachers: Chiron and Phoenix in the ILLIAD." *Greece & Rome, Second Series*. 44(1), 1997, pp. 1-10.
- Marrou, H. I. 『古代教育文化史』横尾壮英・飯尾都人・岩村清太訳, 東京: 岩波書店, 1985年, 20頁, (原書名: *Histoire de l'éducation dans l'Antiquité*. Paris: Édition du Seuil, 1948).
- 水谷智洋「『イーリアス』第9巻の Litai-Ate-Allegorie

- について.』『武蔵野女子大学紀要』第8号, 1973年, 巻末 101-107頁。
- 小川正廣「民話から叙事詩へ—アキレウスの選択とポイニクスの訓話(『イリアス』第9巻)—」『名古屋大学文学部研究論集(文学)』第42号, 1996年, 183-218頁。
- 小川政恭「『イーリアス』IX 312-313の解釈を中心として」『西洋古典学研究』第16号, 1968年, 13-23頁。
- Rosner, J. A. "The speech of Phoenix: "Iliad" 9: 434-605." *Phoenix: the journal of Classical Association of Canada*. 30(4), 1976, pp. 314-327.
- 佐野好則「『イーリアス』第九巻のメレアグロス・パラダイグマの成立に関する一考察—イデーヌとマルペーッサのエピソードにおける詩人の意図をめぐって—」『ペディラヴィウム』第32号, 1990年, 25-41頁。
- Scodel, R. "The autobiography of Phoenix: *Iliad* 9. 444-95." *American Journal of Philology*. 103(2), 1982, pp. 128-136.
- 高橋通男「『イーリアス』第9巻499-512行の解釈— $\tau\mu\eta$ の考察を通して—」『西洋古典学研究』第21号, 1973年, 29-34頁。
- Tsagarakis, O. "The Achaean embassy and the wrath of Achilles." *Hermes, Zeitschrift für Classische Philologie*. 99(3), 1971, pp. 257-277.
- Tsagarakis, O. "Phoenix's social status and the Achaean embassy." *Mnemosyne. Ser. 4, Bibliotheca Classica Batava*. 32(3/4), 1979, pp. 221-242.
- Willcock, M. M. "Mythological paradigm in the Iliad." *The Classical Quarterly, New series*. 14(2), 1964, pp. 141-154.
- Willcock, M. M. *Homer: Iliad Book I-XII*. London: Bristol Classical Press, 1996, first published in 1978.
- Yamagata, N. "Phoenix's speech — Is Achilles punished?" *The Classical Quarterly, New series*. 41(1), 1991, pp. 1-15.

(すずき まどか 初等教育学科)

20 本論文における古典作家及び作品の略称については、原則として、*The Oxford Classical Dictionary, third edition revised*, (Oxford: Oxford University Press, 2003) に拠った。